

自尊の倫理

丸山敏雄の自尊の思想について

野中寛治（倫理研究所研究員）

はじめに

敗戦後の国情の混迷、道義の乱れを憂えた丸山敏雄（明治二十五～昭和二十六年・社会教育家）は、宗教でも主義でも学説でもない、実行すればただちにまちがいないことが証明できる生活のすじみちである純粋倫理を唱導して、倫理運動を創始した。倫理運動の目的は、「倫理の研究ならびに実践普及により、生活の改善、道義の昂揚、文化の発展を図り、もって民族の繁栄と人類の平和に資すること」（「倫理研究所定款」）であった。

倫理運動を推進する中で、丸山敏雄は『万人幸福の菜』（昭和二十四年）を著し、「己を尊ぶの極は、ささげるにある」と書いて、己を尊ぶ生き方を多くの人に力強く訴えた。そして、自らも、その言の通り、「ささげつくす」決心をして倫理運動を創始し、万人の幸福のために一生を「ささげつくした」のであった。⁽¹⁾

そのことは、現在の倫理研究所の前身である「新世会」を設立するためにしたためた趣意書（昭和二十二年）にもはっきりと現れている。己を「ささげつくす」という強い決心をこめて、丸山敏雄は次のように記している。

「新世会趣意書」

我国は今、大切な時に当っております。というのは、道義は乱れ、宗教心は薄らぎ、目を覆わしめることも少なくありません。今にしてこれを改めなければ、悔いを後に残すでしょう。日本の再建は、単なる理論や掛声だけで出来るものではありません。目の前の一步一步を明るく正しく、喜んで、しっかりとふみしめて行く、これ以外に道はありません。

我国は、古いだけに間違いも積み重なり、悪い習慣も多く、知識の上からも、道義の点からも、世界の国々に、遅れていることが、はっきりと分ってきました。これもまた、今改めなければ、再びその時機は参りますまい。これを見、これを思うと、たまらない気になります。至らぬながら、自分一人で間違いの責を背負って立つという強い決心で進みましょう。

このままに捨てておいたら、日本が地上に存在する意義も無くなるでしょう。自ら助けるものでなければ、天は助けません。本会は、こうした止むに止まれぬ念願から発足致しました。ここに機関誌『文化と家庭』は、正しい生活の源となり、朗らかな家庭のうるおいとならしめたいと誓っております。

世の前途を憂え、世界平和を願う諸兄諸姉、こぞって参加愛読せられますよう、又実践の道づれとして、雄々しく発足せられますよう、願って止みません。⁽²⁾

ここにある「自分一人で間違いの責を背負って立つという強い決心で進みましょう」という言葉は、日本再建のために一人で起つという丸山敏雄自身の強い決意と気概であり、そこにはまた、丸山敏雄の自尊の思想が端的に現れている。

本稿では、丸山敏雄の自尊の思想の中核である「自尊の究極はささげるにある」の意味について、また、丸山敏雄の自尊の思想の根底にあるものは何か、さらには自尊に生きる人生とはどのようなものなのか、について考察を進めていくことにする。